



「夢を忘れずに」



肉用牛経営：

朝日村小須戸 山賀 治彦氏

高校を卒業後、就農して二十数年肉牛飼育に取り組んで来た中で、今思えば色々な事があり特に三つの転機となる事柄がありました。

まず一つ目は、就農三年目岩手県の篤農家での研修です。当時周囲の牛飼いか知らなかった私が農閑期を利用して畜産県の岩手での先進農家へ研修に行かせてもらう事になり三ヶ月間実習してきました。そこでの体験で強く思ったことは、肉牛に対する考え方と所得の違いでした。80頭規模で千数百万円の所得は信じられない事でした。それだけに肉牛を職業としてゆくには、しっかりとした考え方を持たなければならないと思いました。二つ目は、昭和59年の新潟北部畜産基地への入植です。10数頭規模から70頭規模への増頭と、水稻主体から肉牛主体へ経営を転換した事です。5～6人の仲間と協同作業を一緒に勉強し、今現在の基礎を作ったころでした。三つ目が最近のBSEによる経営の悪化です。絶対に出る訳がない和牛からBSEが風評被害とも言える消費の落ち込みで価格が暴落し、先の見えないトンネルの中のような不安な日々を一年近く過ごしました。その頃牛舎の増築を考えていましたが諦め将来への希望を無くした時期でした。それから一年以上経過した今、ようやく価格も回復し「にいがた和牛」も発足、「村上牛」の名声が全国的に有名になるなどようやく明るい兆しが見えてきました。二十数年の間ですが畜産を取り巻く情勢も大きく変わって来ました。さらにこれからは「食の安全・安心」は必要不可欠な事柄となりトレーサビリティなど、しっかりと実行し「村上牛」のブランドを守り、良い牛肉生産と高い所得を目指して、二十数年前に想い描いた「自分の夢」を忘れずに、これからも前向きに取り組んでいきたいと思っています。



「父の遺言」



養豚経営：

柿崎町川井 長井 洋一氏

先日畜産協会主催の畜産経営者協議会に出席した折に事務局の担当者より原稿の依頼を受けました。頑く固辞したのですが押し切れ原稿を引き受けた次第です。

私事になりますが十年間寝たきりだった父を二年前に亡くしました。我が家は鉄道員だった父が戦後復員し分家して農業を始め私が二代目です。昭和25年にゼロからの出発であったと聞いております。水田が少なかったので畜産に活路を求め、昭和35年頃までは初生雛の育雛、その後昭和40年頃までは千羽の養鶏が我が家の生活を支えました。

昭和42年に私が就農し養豚を経営の柱にし、現在母豚30頭の一貫経営を行っております。

父が独立した当時は米単作地帯の集落で冬期間の出稼ぎが当たり前の中、結婚したばかりの妻を残して出稼ぎは絶対しないと言うのが父の信念で「渴して盗泉の水は飲まず」を座右の銘に貧しくとも農外収入を求めず、専業農家を志して働き三人の子供を育てました。そんな父母の姿を見て育ち、私も自然に農業を継いでいました。以来37年、私は養豚を続けていますが、今春、大学を卒業する長男は自動車関係の仕事に就職が決まり、我が家の三代目は望めない状況です。私の妻は町立保育所の保育士で結婚と同時に兼業農家になりました。お互いの仕事を尊重して25年、農業所得が落ち込んでも安定している給与所得で家計のやり繰りをして三人の子供を皆大学に進学させました。こうゆう私の農業経営規模は結婚当時より現状と変わらず、私自身のプロ意識の欠如からコンサルの結果は低レベルでした。後継者も育たず将来展望も描けない状況の中でもがき苦しんでいるのが現実であります。また、一方ではBSEや鶏インフルエンザの影響で乱高下する肉豚価格に一喜一憂している自分が情けなく思えます。農業だけの生活基盤確立の道を選択していれば、プロとしての農家意識も後継者も育ったのかも知れません。父の遺言とも言える「渴して盗泉の水は飲まず」の信念が私には欠けていたのかと思うこの頃です。